氏　　名	Ayse Ilgin Sozen
授与した学位	博　士
専攻分野の名称	文化科学
学位授与番号	博甲第 6871 号
学位授与の日付	2023 年 3 月 24 日
学位授与の要件	社会文化科学研究科 社会文化学専攻 （学位規則 4 条第 1 項該当）
学位論文題目	Academic Culture Shock of Turkish International students During Cross-cultural Transition to Japan
学位論文審査委員	教授　田中　共子　　教授　安藤　美華代 准教授　RENOUD　Loïc　　教授　栗林　裕

学位論文内容の要旨

本研究の目的は、トルコ出身の大学院生が日本の学術的および文化的文脈にどのように適応したか、すなわち在日トルコ人大学院留学生の学業面における適応、異文化適応、および異文化間ソーシャルスキルについて調べることである。在日トルコ人留学生に関する心理学的研究は未開拓で、その異文化間ソーシャルスキルの研究も存在しておらず、本研究は開拓的で探索的な初期的研究として位置づけられる。

調査協力者は、大学院教育を受けているか、または修了した 25 から 37 歳の 20 人の在日トルコ人である。自身も在日トルコ人留学生である筆者が、母国語であるトルコ語を用いて半構造化インタビューを実施した。本論文では、学業面での適応（研究 1）と異文化適応（研究 2）について検討したうえで、データセットを合わせてソーシャルスキル（研究 3）について検討した。分析方法には、グラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）を用いた。

研究 1 では、日本のアカデミックな文脈下において生じる、アカデミックカルチャーショックを探った。そこには 9 つのカテゴリが見出された ; (1)日本の大学制度の学業経験と渡航前の概念、(2)日本の大学での学業経験、(3)学術的自立性の開発、(4)学業の成果、(5)学術的背景、(6)学術的移行に影響する学術的条件、(7) 学術的移行を困難にする学術的条件、(8)学術的適応に影響する対人的条件、(9)適応プロセスの中での困難への取り組み。在日トルコ人留学生は、日本の大学の指導にみられる指導慣行に遭遇して困難を経験し、アカデミックカルチャーショックを経験していた。自律学習のレベルが低く、指導教員からより多くのガイダンスとフィードバックを期待する学生の場合は、学びへのモチベーションの低下とストレスレベルの増加が生じ、日本の学業システムへの適応

に対する緊張が高まった. 反対に、自律学習スキルのレベルが高い学生や、日本のアカデミックシステムが自律学習を必要としていることに気付いた学生においては、アカデミックカルチャーショックのレベルは低く、日本のシステムへの適応がより迅速であった。この結果は、学生が日本の学術システムに移行する際に、文化的な違いによって困難を経験したことを示す。学生に学業ストレスの軽減と学業面での自立を促すには、日本の学問文化に対応したスキルを養うことが勧められる。

研究 2 では、日本でトルコ人大学院生が経験した異文化適応のプロセスを調べた。その結果、説明モデルを構成する 9 つのカテゴリが見出された；(1)文化を中心とした期待、(2)社会化における対人経験、(3)適応を促進する介在条件、(4)適応を強化する移行条件、(5)適応に影響を与える対人条件、(6)社会文化的背景、(7)対人関係と文化特有の行動のためのスキル、(8)適応プロセスにおける困難に対する解決方略、(9)関係の帰結。彼らは、来日当初は母国文化に倣った密接な対人関係を期待していたが、それに沿ってとった初期の対人戦略はほとんど失敗しており、新たな友情形成への努力の低下をもたらした。トルコと日本の文化差は、彼らが日本の対人プロセスへ移行する際の支障となったが、しかし最終的には多くの者が、他者との関わり方をより日本的なスタイルに調整して、ホストとの関係を構築するようになった。母国と同様の関係を形成する期待を満たすことと、日本人の対人関係の持ち方に合流することは区別されており、この意味では関係性に関する安寧と適応は必ずしも重なるものではない。

研究 3 では、在日トルコ人留学生の異文化間ソーシャルスキルを調べた。トルコ人留学生は多様な環境で多くの種類のソーシャルスキルを使用していた。「日本の学術文化特有のソーシャルスキル」と「文化特有のソーシャルスキル」が見出された。在日留学生の異文化間ソーシャルスキルについて、先行研究では獲得スキル、回避スキル、維持スキルという分類枠の報告がある。今回の在日トルコ人留学生のソーシャルスキルを、この枠に当てはめながら解釈した。

総括と今後の展望として、以下が述べられた。在日トルコ人大学院生は、日本への環境移行の際に、ポジティブな経験とネガティブな経験をしていた。多くの者は日本のアカデミックな背景と文化的な背景に次第に適応を果たしていき、文化特異的なソーシャルスキルを習得していった。そして大学院プログラムの質にはおおむね満足していた。彼らの文化変容過程に関する知見は、適応を予測するため、および受け入れ側が支援を充実させるために活用できる。彼らにとっては、異文化間ソーシャルスキルは現実的な対処方略となる。本研究が提供した視点は、トルコ人大学院生の日本への適応に影響を与える要因への理解を助けるものとなる。本研究から、日本での対人関係や社会生活に適応するための助言を見出すことで、異文化適応の促進に繋がることが期待される。

学位論文審査結果の要旨

審査においては、本研究の評価される点と課題となる点が指摘され、細かい質問や発展的な問いによる質疑が行われた。まず本研究の評価される点には、以下が挙げられた。厚い記述による質的研究で、大部の労作であり、重要な主題を扱っている。対象者が様々な問題を抱えていることが現

実味を持って描き出された。彼らの困難は解決が必要なことであり、報告することでその問題性が理解される。トルコ人留学生を支援する際には、確実にヒントになる情報である。トルコ人が日本に適応するという現象に注目した、最初の学術的研究になった。トルコ人に限らず、在日留学生や在日外国人の問題としてみても、共有する視点が見いだせる貴重な知見である。社会を漠然と捉えるのではなく、学修のためのクラスや大学にも文化差が存在しており、その異文化適応に苦慮している現実が描き出されている。

一方、本研究の課題として、以下が指摘された。少人数を掘り下げる面接調査であり、人数は 20 人と限定的である。トルコから日本への留学者の数が限られる中でその 1 割にアクセスした貴重な試みではあるが、サンプルの限定性は結果の一般性についての解釈を困難にしている。トルコには地域差があり、協力者のプロフィールの偏りを考慮する必要がある。どこの出身者かによって差異が生じる可能性があるため、トルコ人一般への説明力は未詳である。日本文化論として著名な、基本的文献と思われる言説への言及が不十分なため、文化論としてみた場合には物足りなさを残す。

様々な質問として、以下が挙げられた。日本留学前に知らせるべき情報を recommendation としているが、この場合は advice が適切ではないか。face と honor の違いをどう捉えているか、教員の指導の仕方に疑問を持つ学生の事例は face の観点から解釈できないか。適応の文脈において wellbeing の概念はどう捉えられ、adjustment とはどういう関係にあるのか。困難の経験が描かれているが、研究協力者は総じて適応に成功したとあるのは、どのような適応観に基づくのか。スキル習得の個別事例では、文化変容を報告する者と、変容がほぼなかったと述べた者がいるが、文化受容と異文化適応はどこまで重なっているか。トルコと日本の集団主義・個人主義傾向などの文化的差異に関する知見は、今回の結果にどう反映されているか。研究手法に質的手法を選んだ積極的な理由は何か。分析に GTA を使った理由は何か。この後、量的研究への展開を視野に入れるとしたら、それに活かせる知見は見出せたか。トルコ人に独特な異文化間ソーシャルスキルはあるのか、あるとしたらそれは何か。日本人の視点を加えることで比較や検証が可能になり、主観世界の分析を超えて制度論への展開が可能になるのではないか。本研究から簡潔なメッセージをまとめるとしたらどうなるか。従来の留学生研究との異同は何か、対象者の出身地を揃えることで新たな発見があったか。本研究の価値として、異文化適応研究自体への新たな発見を述べるとしたらそれは何か。

上記の問いへの応答においては、トルコと日本の文化の対人関係の特徴、文化的特徴に関わって選択される対処方略の傾向、異文化適応の定義と構成と下位概念、異文化適応の特徴としての過程性、異文化適応における個人差の影響、文化と個人の親和性、語の選択と表現の意図、調査協力者の視点などが説明された。方法の選択には、異文化圏での生活の現実を捉え、異文化適応のプロセス性を吟味することなどが理由に挙げられた。発見や成果としては、トルコの文化的特徴に寄り添って異文化適応の困難と対処が可視化されたこと、トルコ文化と日本文化の対比が適応現象を素材として描出できた点が挙げられた。そして本研究への応用面の示唆と続く研究への展望が語られた。

本研究は、未開拓の主題に着目して先の研究への端緒を開いた研究である。日本の異文化適応現象を英語で発信しており、海外でも共有される。今後はサンプルを拡大してより精緻な検討に繋げ、知見を充実させていく発展が待たれる。独立した学術論文としての複数の報告を総括した本研究は、

その開拓性と創造性に学術的価値を備え、現実的な議論と示唆的な結論への発展は社会的にも興味深い。本研究が学位論文の水準を満たしていることを確認し、全員一致で合格と判断した。